

徳法寺

エセ医学を批判する

杉谷伊吹

こんにちは、お元気で過ごしてはいかがでしょうか。近年、健康に対する関心が非常に高いように思いますが。そんな中、私にとって特に気になるのは、エセ医学の類です。それらは質も種類も多種多様であるため、全部に全部目くじらを立てる必要が無いのは承知の上です。ですが、昨年はインターネット上でのエセ医学に対する糾弾も多く見られ、場合によっては逆に健康を損なうという注意喚起も行われていました。そこで、主に昨年話題となったエセ医学を確認してみようと思います。

まず、昨年最も印象に残ったのは「血液クレンジング」です。処置の内容としては、静脈の色あせた血液を注射器で体外に抜き出して、その抜き出した血液にオゾンを加えて身体に戻すというものです。人間の身体は肺で酸素を取り入れ、その酸素が血管を通じて体内に配られています。動脈は肺から全身に向かう往きの道であり、血は酸素を多く含んだ赤色をしています。静脈は全身から

肺に向かう帰りの道であり、血は酸素を放出してしまつたので黒っぽくなっています。この「血液クレンジング」で使用されるオゾンとは酸素の同素体になります。(酸素はO₂で、オゾンはO₃です。どちらも酸素分子Oで構成されていますが、噛み合っている数と結びつき方に違いがあります。また、各々性質も異なります。)オゾンは酸素より酸化力が高く、それが静脈の黒い血液に加わると、とても赤い血液に変色します。これが「血液クレンジング」のおおよその仕組みです。鮮やかな赤に変色する血を見て、少なくとも実際の効果以上のものと錯覚してしまう訳です。気持ちいほど分かりますが、冷静に分析すると、これは体内で普通に行われている事を放出して健康になるという考え方です。)を目的として手を出す人も居るようですが、これに関しても一切根拠は無いようです。それどころか、厄介な事にこの「血液クレンジング」は、衆議院厚生労働委員会でもそのリスクについての議論がなされる等、とても胡散臭いものなのです。有名芸能人も数名手を出していたようですが、安易に流行りものに手を出すのは危険だと認識させられますね。

次に、年末に話題になったのが「デトックスバス」です。これは完全な詐欺なので、処置内容の説明すらできません。水槽のような機器を使うのですが、足湯のような感じで機器のお湯に足を入れ、電源を入れて待っていると、汚いドロドロした物質が水面に浮き上がってくるというものです。売り文句は、「体内に蓄積された毒素を足裏から排出している」

この事ですが、当然そんな事はありません。では、出てくる汚れは何なのかと言いますと、水槽に入っている電極の鉄が溶けたものなのです。食塩の混ざった水に鉄を入れ、そこに電気を流すと溶けた鉄が汚れとなって出てきます。実際、足以外の適当なものでも「デトックスバス」を入れて、同じ事が起きたという報告があります。この「デトックスバス」も「血液クレンジング」と同じく、変化が目に見えるために騙されやすいものだと言えるでしょう。こちらはまず害は無いと思われませんが、時間と金の無駄であることは間違いないです。

まだまだ書きたいエセ医学もありますが、文章量的に限界が来てしまいました。まとめとして、基本的にエセ医学は、薬にも毒にもならないものが多いうです。精神的にスッキリするという意味では、問題にならない様にも考えられます。しかしその方法に固執して、本来受けるべき治療に目がいかなくなるのは困るので、特に害があると分かたら直ぐにやめるべきだと思っております。エセ医学に引っかからないように、注意深く健康を大事にしていきたい所です。

ちなみに私は新年早々食中毒になりました。皆様、生モノにもご注意ください!!



和歌山で生活して

杉谷 美乃里

私は、昨年暮れまでの約一年三か月の間、和歌山県で仕事をしていました。今回は、そこで感じたことを振り返ろうと思います。

私は和歌山県の中でも、山間部にある紀美野町きみのちやうの農家が経営しているジェラートのお店で働いていました。紀美野町には大きな建物はもちろん、人家や街灯も少ないので、夜になるとプラネタリウムのような星空が一面に広がります。私はこの土地に移り住んで初めてそのさまを見たとき、あまりの美しさに心から感動しました。

しかし、いつしかそれも、当たり前の風景になってしまいました。紀美野町での生活に慣れてくると、金沢での生活と比べて不便だと感じる部分ばかりが目につくようになりました。バスの本数は一日に数本しかないうえに、一番近くのショッピングセンターへ行くのにも車で一時間はかかるのです。

このような紀美野町に、大阪や京都、兵庫などの関西各地から多くの観光客が訪れています。彼らはこの町でキャンプを楽しんだり、新鮮で安い農産物を購入したり、その食材を使った料理を楽しんだりしていきます。近年はインスタ映えブームの影響もあり、グランピング等の手軽でおしゃれなキャンプを楽しむ若者も増えています。私が働いていたお店にもそのような観光客が多く立ち寄っていました。

大勢の観光客でにぎわうこの町ですが、過疎化が進み高齢化に苦しんでいます。なぜ、人はわざわざお金と時間をかけてまで訪れるのに、住もうとはしないのでしょうか。やはり、私が感じていたように大きな町に比べると不便なところがたくさんあるからだと思います。ではなぜ、人々はあえて不便な場所に来るのでしょうか。

この数十年の間に、私たちの生活は以前では考えられないほど便利になりました。便利になったということは、それまでよりもはるかに少ない時間と労力でいろいろなことが出来るようになったということです。しかし、私たちは、以前にも増して日々時間追われているように感じています。時間が節約できたのならば余裕ができるはずなのに、逆に余裕がなくなってしまうのです。

紀美野町のような過疎化・高齢化が進んでいる地域は、確かに以前よりははるかに便利になってはいるものの、都市部に比べれば、時間に追われることなく過ごすことが出来るのです。時には時間を持て余して、何をすればいいのか不安に感じる程です。紀美野町を訪れる観光客は、ただ空気がきれいであるとか、星がたくさん見えるということではなく、時間に縛られる日々から逃れたいという思いに駆られているのではないのでしょうか。実際、私自身、金沢では時間に追われていて空を見上げることもありませんでしたが、紀美野町では日中でも空を見上げ雲の流れをぼんやりと眺めていることがありました。仕事や日常生活の忙しさによるストレスに押しつぶされそうになっている人が、今この国にはあふ

れているのかもしれない。一度便利さを知ってしまうと、不便な生活に戻ることは容易ではありません。しかし、時にはあわただしい日々のストレスから解放されたいと願うのです。それが紀美野町のようなところなのではないのでしょうか。ところが、紀美野町のような場所は、過疎化や高齢化によって日本全国から消えつつあるのです。

紀美野町のような町が将来も存続してゆくためには、皆が時間をゆっくりと過ごすことのできる地域の大切さを認識して守っていかなければならないのだと思います。私にとってここで暮らした時間は、短い間でしたが、けれどもかけがえのないものでした。紀美野町が将来も空を見上げることできる場所として存続してゆくことを願ってやみません。



真宗人物伝（四十八）

杉谷 浄

幡谷の唯信

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第二十三番である幡谷の唯信です。

幡谷の唯信を開基とする信願寺が伝えるところによると、親鸞聖人が稲田の草庵から鹿島神宮に行かれる途中、小川町幡谷に城を構えていた幡谷次郎信勝が親鸞聖人に帰依して唯信という法名を賜ったとされています。

『親鸞聖人門侶交名傑』によれば、唯信はその後、奥州に道場を建て、その後、常陸国小瀬のあたりに寺を移したとされています。親鸞聖人入滅後には、九年間京都でその墓を守ったとも伝えられ、その間、山陰地方にも布教したとされています。島根県浜田市真光町顕正寺は、開基を幡谷の唯信としており、信願寺と共に二十四輩二十三番を名乗っています。この幡谷の唯信に限らず、二十四輩に数えられている親鸞聖人のお弟子たちは、一か所に留まることなく、各地に赴いて教えを広めています。現在、多くの僧侶は、寺に住みその土地の中で生活することが当たり前のようになっていますが、親鸞聖人の弟子に限らず、江戸時代以前には、僧侶は各地を移動して生活することが珍しくはありませんでした。そのため、各地に同じ僧侶を開基とする寺がいくつもあ

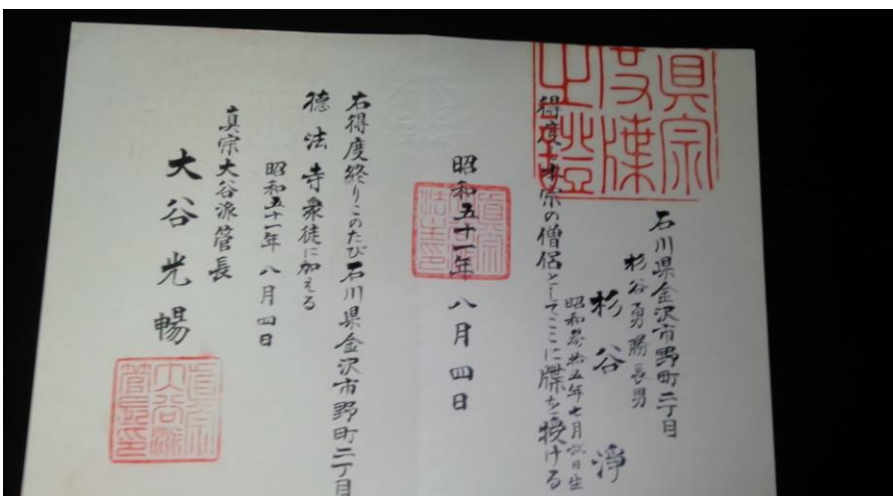
るのです。もちろん僧侶の数が今よりかなり少なかったこともあり。しかし、当時の僧侶は教えをより多くの人々に伝えるということを大切な使命として認識していたのでしょうか。

ところで、前回の「真宗人物伝」で紹介した「戸森の唯信」と今回の「幡谷の唯信」が同じ法名であることにお気づきでしょうか。二十四輩の中には、もう一組「穴沢の入信」と「八田の入信」という同じ法名の方がいらっしやいました。いずれの方も親鸞聖人に名前を付けていただいたことになっていますが、だとすれば、わずか二十四人の中に二組も同じ法名を付けてしまうというのはおかしな話です。

僧侶になることを「得度」といいますが、親鸞聖人の時代「得度」は国の許可制でした。しかし政府の許可を得ていない「私度僧」と呼ばれる者も多くいたのです。「私度僧」は違法ですから取締りの対象でしたが、僧侶としての実態のある者については容認されていたようです。親鸞聖人は流罪になった折、僧籍を剥奪されましたから、正式な僧侶ではなくなっていました。そこで、善行寺が認可した「私度僧」である「善光寺聖」となっていたと思われます。親鸞聖人の弟子たちも、親鸞聖人にならって「善光寺聖」になっていたと思われるのです。同じく善光寺配下である親鸞聖人に、弟子の法名を付ける権利があったとは思われません。とすれば、本来僧侶であった親鸞聖人はともかく、弟子たちの法名は善光寺が付けたの

ではないでしょうか。当時「善光寺聖」がどれだけいたのかは分かりませんが、関東を中心にかかりの数がいたと思われます。それらの「善光寺聖」に無作為に法名を付けていたとすれば、同じ法名が多くあったとしても納得できます。

歴史はいつの時代も都合よく上書きされていきます。そこに生まれる違和感から、事実を推測していくことも歴史の面白さなのです。



現在は各宗派で僧侶資格を発給している。写真は私が頂いた「真宗^{どちよう}度牒之証」。度牒とは得度した僧尼に交付される身分証のこと。奈良時代から平安時代には一年に十人しか受けられなかった。鎌倉仏教が力を持つようになると各宗派が国に代わり得度を行うようになる。明治時代以降は国家資格ではなくなった。2018年度の大谷派得度者は470人程。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますのでお気軽にご参加ください。

徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

- 三月 縄文から弥生時代の宗教
- 四月 古墳時代
- 五月 仏教伝来

今年から、仏教入門講座の第二章として、日本仏教史を行います。インドで生まれた仏教は、日本に伝わると大きな変化を遂げます。これは、インドと日本では、基礎となる宗教観が大きく異なっていたからです。教えを受け入れる基礎が違えば、同じ経典を読んでも理解が異なってしまうのは当然です。そこで、最初に仏教伝来以前の日本の宗教を二回に分けてたどってみます。三月はシャーマニズムといわれる、世界各地で見られた自然崇拜です。文字のない時代ですから遺跡などから推察します。四月は中国から伝わった道教の影響を受けた卑弥呼や古墳時代の宗教です。これが現在「神道」と呼ばれるもののルーツになります。関心のある方はぜひ参加してください。参加費はお賽銭のみです。

徳法寺 仏教入門講座 2 日本仏教史

身近なようで、実はよく知らない仏教のあれこれ。

同じ仏教なのに、なぜたくさんのお寺と神社がどう関係しているのか？

インドの仏教とは何が違うのか？

これらの疑問に答えます。

初心者にわかりやすい講座です。講師は徳法寺住職 杉谷淳です。通訳ではなく歴史講座です。毎回終了後に質問の時間があります。

座席は限りません。特定の宗派に偏ることなく、神道を含む日本の宗教史の中で仏教を眺めていきますので宗派に関係なくご参加いただけます。

毎9回の講座で、全16講座の予定です。3月から11月までの年9回、毎月21日の午後7時30分から9時までの講座です。毎回資料をお配りします。欠席された方にも次回お渡しできます。

会場： 徳法寺 金沢市野町 2-3-2-4 電話 076-241-5219
日時： 第1回 2020年3月21日(土) 午後7時30分から9時まで
第1回目は「仏教以前 1 縄文から弥生時代の信仰」です。
* 参加費はお賽銭のみです。お気軽にご参加ください。

徳法寺春彼岸展

山口哲司作品展

三月十七日

(火)から二十三日(月)まで、二

〇一四年春以来

二回目となる山

口哲司さんの作

品展を行います

す。布地に描か

れたほのぼのと

した作品です。

午前九時から午後

五時までですが、

ご連絡をいただき

ましたら時間外で

もご覧になれます。

春彼岸法要及び永代経法要

今年から当寺住職が法話をします。日程は、三月二十日(金・春分の日)午後二時から午後四時ごろまでです。読経の後、法話となります。お誘いあわせの上お参りください。

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076 (241) 5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>

